

アメリカの外交政策を理解するために

(その4) Review and Trump's Diplomacy (復習およびトランプの外交)

吉岡大史

最終回となる今回は、これまでに紹介したStatecraft (ステイトクラフト)、Realism (リアリズム) とIdealism (アイディアリズム)、そしてThree Levels of Analysis (スリー・レベルズ・オブ・アナリシス) を復習しつつ、これらを使ってトランプ米大統領の外交について若干の考察を試みたいと思います。

まずはstatecraftについて。これは米国がその外交政策において国内外の人的・物的資源を組み合わせ、国益を追求することでした。私が通ったIWPのレンチョウスキー学長はこれをオーケストラにたとえて「楽器の演奏方法と他の楽器との協調の仕方に習熟すると共に、オーケストラ全体を指揮する術を身に付けよ」と述べています。

トランプの外交はstatecraftの理念とはかなり距離があるようです。彼の「アメリカ・ファースト」は国益追求の点でstatecraftから外れていません。しかし、オーケストラの名指揮者になることは望んでいないようです。むしろ指揮者自らが進んで不協和音を引き起こし聴衆の歓心を買っているように見えます。ドイツ・韓国など同盟国とのぎくしゃくした関係、政権内部での高官の相次ぐ交代、外交の要であるインテリジェンスを担うCIAとの確執など、まさに不協和音の連続です。別の見方をすれば、statecraftが内包する権力構造や省益・権益への疑念と挑戦と言えるかもしれません。

次にRealism (現実主義) とIdealism (理想主義) について。両者は共に、国益追求のために軍事力に頼ることは共通しています。そのうえで、Idealismの場合、国際機関や国際条約の枠組みも重視し、自由・幸福追求・人権・自由市場といった理念を世界に広げること、米国の国益と世界の「平和と安定」に貢献できると考えます。

トランプ外交について言えば、第2次世界大戦以降の米政権が民主・共和の違いを超えて継承してきたIdealismの流れからの断絶が目立ちます。これはネバダ州立大学で受講した「アメリカ外交政策」でシャオユウ・プー教授から教わったことですが、トランプは2017年1月の大統領就任式で「米国は米国の生活様式を他の誰かに押し付けようとはしない」と演説しました。オバマやブッシュが自由・人権・民主主義とそれを支える機構を世界に広げると宣言したのとはずいぶん異なります。トランプはまた、国連演説で国際機構への懐疑と強く独立した国家の意思・役割の重要性を繰り返し強調してきました。この間の国際合意・機関からの米国の離脱はその現れとも言えます(トランプ政権に限らず、米国には単独主義の歴史があることも覚えておく必要があります)。

最後にThree Levels of Analysis (3つの分析手法) について。これは米国もしくは世界各国の外交政策を国際的・国内的・個人的視点から分析するものでした。

これをトランプ政権の成立とその外交の概観に当てはめてみます。国際的な視点としては、2008年の世界金融危機以降の世界の潮流を見る必要があります。すなわち、反グローバリズムや移民への反発、「1%の持てる者」とそれを支えるエリート層への反感などの流れが、トランプ政権の誕生とその外交・内政を支える背景にありそうです。

国内的には、上記の背景ともあまって、「民主党支持者」か「共和党支持者」か、という政治的アイデンティティに基づく米国社会の二極化が、トランプ政権の外交・内政を支えるエネルギーになっていると言えます。専門家の中には「2016年のトランプの勝利は、アイデンティティを脅かされていた米白人の勝利だった」(『フォーリン・アフェアーズ・リポート』2020年8月号43頁) という見方もあります。

個人的な資質の視点で言えば、トランプの資質と彼の外交姿勢の関係が論じられています。例を挙げれば、『Trump Revealed』の共著者マーク・フィッシャーは次のように述べています。「ドナルド・トランプはまさに二項対立的な人生観を持っているが、世界観においても同様だ。中国との対立に関しては、勝者になるか敗者になるか、それ以上に彼のパーソナリティに訴えるものはない」(※FRONTLINE 「Trump's Trade War」2019年5月7日)。米中貿易戦争は彼自身の「個人的な闘争」でもあったのです。

以上をまとめれば、トランプ外交を理想・エリート主義との断絶・闘争として特徴づけることができるかもしれません。9月後半にはトランプの4回目となる国連演説が予定されています。彼がどんな外交姿勢を示すのか。大統領選の行方と共に注目です。

短歌

敵基地攻撃能力

田上悦子

月読の落ちて欠けるは不実どうシヨリエントの恋また十三歳

ほげ十年続けて越える壁一つ短歌の通信教育評価に見入る

戦争の体験者減り部下の奥に敵基地攻撃能力の立つ

バンクシー、バスキア

山本晶子

人間はみな罪深し牛を食べ鶏を食ふ涼しき顔で

草のみを食べているのに骨がでる脂身の出来る牛とう生き物

こういう絵でないと現代は語れないのかバンクシー、バスキアの絵を見つむ

人類の知恵

叶岡淑子

この国の核禁条約不参加のこのもろかしき今日被爆の日

核兵器のまたに一万四千発 世界に存する脅威を思う

コロナ禍と異常災害ついで地球 今も問われる人類の知恵

俳句

花蘇鉄の四季

小澤 幸泉

初夏の土佐の山々とおいら

また一人置き去りて逝く夏の空

幽霊の出番見つけぬ土佐の梅雨

仏法僧今年も律儀であらう

夏祭りとおくに開け団地族

娘の描くポンポンシリア類の中

川柳

帆傘集

小澤 幸泉

被爆者の祈り届かぬ原爆忌(8・6)

終戦日は兄も戻らな(8・15)

長崎の鐘は平和を告げ知らず(8・9)

夏空の土佐の山脈君遠く

生き抜いてコロナ感染止めさせよ

熱中症も無視してコロナ行へ

眼が覚める今日も生かされ生きてゆく

高退協文芸

詩

小さな青空

西村雅人

駐車場の車の中で
父の検査がすむのを
待っている

エア・コンをつけて
シートを倒して
窓の向こうの空をながめている

灰色の雲に囲まれた
小さな青空を
なにも考えず
ただながめている
ただ生きていく

川柳

帆傘集

小澤 幸泉

被爆者の祈り届かぬ原爆忌(8・6)

終戦日は兄も戻らな(8・15)

長崎の鐘は平和を告げ知らず(8・9)

夏空の土佐の山脈君遠く

生き抜いてコロナ感染止めさせよ

熱中症も無視してコロナ行へ

眼が覚める今日も生かされ生きてゆく